



鹿骨東小学校



鹿骨東小学鹿骨東小学校公式ホームページ <http://edogawa.schoolweb.ne.jp/shishibonehigashi-e/>

「教育は100年の計」

江戸川区立鹿骨東小学校

校長 中田 伸代

日本ではよく「教育は100年の計」といいます。転じて「国家百年の計」とも言い、次の時代を見据えた教育の重要性がよく語られます。この言葉のもと、中国の「管子」という書物に書かれている「1年の計画なら穀物を植え、10年の計画なら木を育て、終身の計画なら人を育てるべきだ」という文章から来ており、人材育成の大切さを意味しています。元の物語はこうです。

昔、中国の王様が森で、一人の老人に会いました。老人は息を切らせながら松の苗木を植えています。王様は「この松はいずれ立派な材木となるだろうけれど、それではおじいさんの生きている間に使えませんね。」と言いました。すると老人はこう答えます。「木は植えてから100年後にこれを用いて役立てるものだ。自分が生きている間に用いられないから無駄ではないか」という王様は、とても国を治める方の言葉とは思えない。こんなことで国を治められますか。」さらに「私は年老い先の短い身であります。子孫のために木を植えているのです。」と言いました。王様は自分が間違っていることに気が付き、その老人に食事をさせてねぎらったということです。(中国の思想(8)第3版 管子 松本 一男訳)

この夏、私はプライベートでベトナムの山奥にある少数民族の村を訪問しました。NPO法人CSRスクエアの「ベトナムスタディーツアー」に参加し、ハノイから車で6時間。通訳のハノイ大学の学生さんも行ったこともないような山岳地帯には、53もの少数民族が暮らしており、それぞれの言葉と独自の文化、生活習慣を持っています。急激に発展するベトナム経済の中で、もともとベトナムの公用語を話さない少数民族の子供たちは、インフラの整わない環境の中で、極度の貧困の中で暮らしています。日本の5年生までで小学校を終えると中学校は車で3時間離れた町まで出なければならず、寮に入ってから進学はお金がかかるためにあきらめざるを得ません。特に女の子は、小学校を出てすぐに家の手伝いをするか、結婚をするかです。現地の教育委員会や幼稚園、小学校、中学校の先生方は、私財を投じながら、子供たちに公用語を教えて社会で生きていくすべを与えつつ、民族の伝統的な言葉や物語、伝統芸能を継承できるように学校でクラブ活動を作ったり、小学校卒業後に伝統的な民族衣装などを作る職業訓練校を作ったりして、現金収入を得て、自立し、民族の誇りと文化を継承できるように頑張っている様子を見ました。そんな小学校の一つ、クオンハー小学校では、日本から持って行ったけん玉や折り紙、長縄などを教え、別の団体の方からの一人1冊の絵本の寄贈などを行いました。お返しに、布を巻く段ボールの芯をリサイクルした筆たてを、本校の児童にプレゼントしてくれました。自分だけの本など普段手にすることがない子供たちが、すぐに食い入るように本を読む姿、けん玉や縄跳びに瞳を輝かせて参加する姿はとても素晴らしく、一緒に行った全国の先生方とともに教えることの喜びと素晴らしさを再確認しました。また、昨年、本校の6年生がSDGs募金でリチウムイオン蓄電池式ワイヤレススピーカーを寄贈した、フック・ソン小学校では、校庭中を覆うことができる、サーカスのようなテントをプレゼントすることができました。体育館もクーラーもない小学校で、一日に何度もスコールのような雨が降る中、校庭のテントの下で、子供たちが活動できるのはとても嬉しいことだと喜んでいただきました。

教育は100年の計。未来を担う子供たちを大切に育てることは、ベトナムも日本も同じ。そして、ベトナムの子供も、日本の子供も、子供たちの目は、世界の自然環境を守るために100年後を見据えてリサイクルやSDGsの活動に向かって輝いているのです。人を育てる仕事にかかわれる幸せを感じた、夏でした。

